

ある家族の新年会での年金談義（1）

団塊の世代に属するある年金コンサルタントが、家族を連れて、妻の実家に2年ぶりに新年の挨拶に訪れた。そうこうするうちに、元大学教授の義父（お爺さん）を交えて、年金談義が始まってしまった。

（コンサルタント一家）お爺さん、お婆さん、明けましておめでとうございます。

（コンサルタント）お久しぶりです、お義父さん。2年ぶりですね～。

（お爺さん）何が久しぶりじゃ。正月ぐらいは毎年顔を見せんか。

（コンサルタント）おととと、申し訳ありません。去年は年金会計基準の改定やらY2Kやらで、忙しかったもので…

（お爺さん）まあええわい。それよりも、年金改革はどうなんじゃ。厚生省は、99年改正で21世紀に頑健な制度ができたと言っておるが。

（コンサルタント）99年の年金改正は、「有識者調査」の実施、「年金白書」の発刊、「5つの選択肢」の提示など、厚生省としても従来以上に、準備を怠りなく国民の意見を吸い上げようと努力したことは、認められると思いますよ。ただ、結局、政治に巻き込まれてしまいましたけどね。土壇場まで法案成立は危なかったし、最後は、年金局長の国会前での座り込みなんて発言まで飛び出しましたからね。

（お爺さん）ふむ。国会と厚生省、政治、国民の間に、大きな温度差があるというわけじゃな。政府内、政党内でも、「税方式か社会保険料方式か」、「世代間不公平の是正」、「給付削減とその限界」など、大きな意見の対立があったわけじゃが、最後まで国民の目に見える形で議論ができず、議論の上での妥協点が見出せなかったのは、その辺が原因じゃろう。

（コンサルタント）選挙制度改革と同じで、仕組みを変えたらよくなるのかっていう検証、確信がないままに、事態が進んでいってしまってますね。有識者や学者という立場の人は、少なくとも、客観的な分析に基づいた意見を述べる責任があると思いますよ。アメリカのゴア対ブッシュ、イギリスのメジャー対ブレアみたいに、思想的な背景の違いが政策に反映できていませんしね。まあ、アメリカもイギリスも、年金については政策の差が縮まってきてますけどね。

（コンサルタントの妻）私なんて、個人年金にも入ってるけど、保険会社は大丈夫かしら。政治家も公共事業には血まなこになって頑張るけど、年金には無関心ね。給付水準を下げたり、支給開始年齢を上げたりと、逃げ水みたいで、老後が不安になるわ。

（コンサルタント）中には、年金、年金と大声をはり上げてる人もいるけどね。「国民を安心させなきゃいけない」っていう思いもあるみたいだよ。この指摘は正しいけど、真綿で首を絞めるようなやり方じゃなく、一旦、思い切って給付水準を下げる必要があるだろうね。この辺の議論はまだできてないけど。

（お爺さん）支給水準もそうじゃが、老後を国がどこまで面倒みるのかという点が大事じゃ。医療や介護とも関わってくる問題じゃな。年金・医療・介護でバランスを取れという話は、総論では簡単じゃが、実際に保険料・支給額の水準をどうするのか、誰がどう負担するのかといったことは、個別の制度じゃあ決められん。こんなことでは、「国民を安心させる」なんてことはとても無理じゃろう。

(コンサルタント) 安心させるどころか、不安になってますよ。改正の度に年金制度は変わっていき、年金額はどんどん減ってしまうと実感した人が多いと思いますよ(図表)。年金給付の5%カットのインパクトは、大きかったですからね。医療・介護を含めてトータルで考えるべきというのは、有識者会議(社会保障構造の在り方について考える有識者会議:座長 貝塚中央大教授)でも指摘されていますが、結局、具体的な議論はできずじまいです。

(お爺さん) そもそも、99年改正で「21世紀の安定的な年金制度が構築される」という前触れ込みだったんじゃないかな。本当にそうなら、もうしばらく制度改正なんて、やらんでいいはずなんじゃないか。

(コンサルタント) 負担を基準にした改正といっても、その負担自体を将来的にどうするか曖昧になってますからね。まあ、これは厚生省と政治とのずれも原因ですから、厚生省だけを責めるわけにもいきませんけど。

(大学生の孫) 僕が65歳になる頃にはどうなっていることやら。保険料は凍結して上がらなかったけど、いずれは僕らが払わなきゃならないんでしょ。父さんが遺産をたくさん残してくれないと、僕らは結婚もできないし、子供も作れないよ。

(コンサルタント) 確かに、みんなが安心して暮らせる状況にあるとは言えないな。今までは、負担も大きくなかったし、例えばサラリーマンを勤め上げれば、年功序列で給料は上がるし、年金も十分にもらえるっていうんで、安心できた。ところが、予想以上に少子高齢化の影響が大きくて、これまでの世代を越えた助け合っっていう概念は吹っ飛んで、いくら払っていくら貰えるかっていう損得論がクローズアップされてきてる。

(お爺さん) しかし、そもそも年金制度は貯蓄とは違って、社会全体での助け合いじゃろう。いくら払っていくら貰うという話じゃあなかるうて。

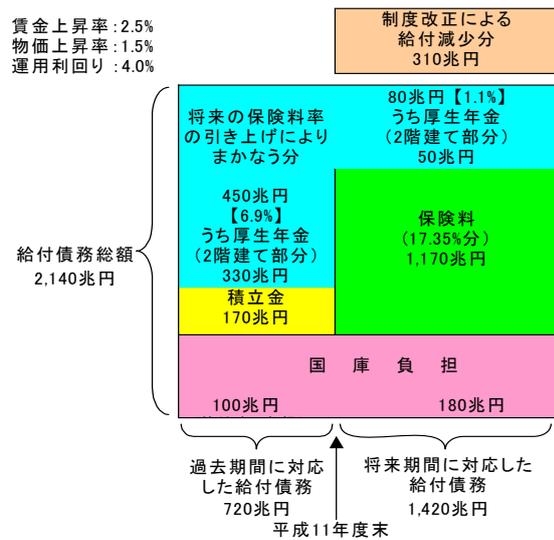
(コンサルタント) とはいえ、世代間でその格差があまりにも大きいと心情的に納得できないでしょうね。相互扶助っていうのは社会保障の原則でしょうけど、現実には受け入れられなくなりつつあるようです。アメリカでは401(k)が普及しているし、イギリスでも4月からステークホルダー年金という確定拠出タイプの私的年金が始まる。老後は個人の自己責任で準備しなさい、というのが今や世界的な流れですよ。ましてや、日本は他の国より高齢化のスピードが速いわけですからね。

(大学生の孫) これからも、少子化が進んで、結局、年金給付カット、保険料負担増加っていうことになったら、僕らの世代はほんとにやっていけないよ〜。

(コンサルタント) やはり、確定拠出タイプの個人勘定のような仕組みが必要かもしれないね。いずれにしても、目先だけの改革じゃなくて、こういう仕組みで給付と負担がこうなっているということをもっとわかりやすくして、国民の誰もが納得できるような制度を作らないと。国民の生活基盤がしっかりせずして、経済の発展も何もあったもんじゃないからね。

※ 次回に続く。

図表 厚生年金の制度改正の影響



注) H9、H11年版厚生省年金白書よりニッセイ基礎研究所推計